

曾野綾子作品選集

9

桃源社版



ひとりだけの哀しみ

曾野綾子作品選集 9
ひとりだけの哀しみ



桃源社

(検印省略)

曾野綾子作品選集 9	ひとりだけの哀しみ 定価 八五〇円	著者 曾野綾子	昭和四十九年九月二十日 印刷	昭和四十九年九月二十五日 発行	発行者 矢貴東司	印刷所 太平印刷社	発行所 東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目 十二番地 株式会社 桃源社
---------------	----------------------	---------	----------------	-----------------	----------	-----------	---

(分) 0033 (製) 274002 (出) 5180

1974 ㊦

曾野綾子作品選集

ひとりだけの哀しみ・目次

帰らざる橋

爽やかな海辺の朝に

弥生の空は

一条の光

烏賊の旗

偏西風

7

19

36

52

110

126

人の将に死なんとするや

日曜日の岩魚

愛

ひとりだけの哀しみ

冬の螢

解説 ● 鶴羽伸子

装
幀

原

弘

曾野綾子作品選集

ひとりだけの哀しみ

帰らざる橋

1

談話室に入った時、アンソニー・ジャクソンは、大きなパンの切れに、生々しい大切れのハムをはさみ、芥子とマヨネーズをたっぷり塗って、新鮮なサラダ菜を一枚はさみこみ、自分でサンドイッチを作り終ったところだった。彼の前には、靴を入れたボール箱ほどのサイズの牛乳の箱（アメリカでは壺をあまり使わない）が置いてあり、彼は多少眠たげな目つきをしてはいたが、決して何かに飢えているような表情ではなかった。

寮長というのは、アンソニーとあまり年も違わないように見える黒人で、私たちと握手をかわすと、歌うような大声で叫んだ。

「ヘイ、トニー、日本からお客さんだー」

アンソニーは、無表情にサンドイッチを手許のナプキンペーパーの上に置いて立ち上る。眼鏡を二本指で、ずり上

げるようにし、感情の流露も何もない、植物的な目つきでこちらを見た。

改めて向い合ってみると、確かにアンソニー・ジャクソンは生粋の日本人であった。髪が多少癖毛であるだけで、眼鏡をかけた顔は、シカゴやニューヨークの町中でよく見かける、賢そうな、悪く言えば抜け目のなさそうな日本人の俤を残していた。ただ、彼の鼻には、ふくふくと肉がつき、その栄養のよさが、アメリカの贅肉のようで、彼を何となく、二世風に見せているだけだった。

「トニーはとても優秀なんですよ。技術者になりたいと言ってる。多分、アイオワ州立大学を受けることになるでしょう、来年」

アンソニー・ジャクソンがサンドイッチを食べ始めた傍で、黒人の寮長が、私たちにトニーのことを賞めた。それでもトニーは表情を変えなかった。賞められて当然と思っているのか、黙っていることが、羞恥のあらわれなのか。テーブルの上のミルクや食物は、朝食に間に合わなかった寝坊した子や、何かの理由で、食後もお腹を空かせている少年たちのために、いつも、そうして用意されているというのだ。

アンソニー・ジャクソンというれっきとした日本人の住んでいるのは、アメリカ・ネブラスカ州にある、有名な「少

年の町」である。彼は数年前から、ここへ、収容されているのだ。なだらかな岡は、二月の厳しい寒風の中で、赤茶けた枯芝の色を見せて拡がり、そのところどころに散らばった重々しい煉瓦建ての家に、高校生たちが、大体一軒に二十五人くらいずつ集まって住んでいるのだった。

風がそれほど冷たくなかったら、それは牧歌的な風景と言えた。少年たちの家は屋根も壁も同じ煉瓦色をした二階屋だが、間取りは勿論、中の調度も、一軒一軒違うらしかった。外は笑顔を見せると歯がしみるほどの寒さだが、中は、シャツ一枚でいられる温度だったし、第一そこには、年頃の男の子ばかりが集まって住んでいる場合につきものの、独特の臭気とか、乱雑さなどというものはどこにもないのだった。

トニーの住んでいる家に来る前に、私たちは、五、六軒おいて隣の（と言っても、百米ほど離れていたが）「少年の町」の有名な合唱隊のメンバーばかりが集まって住んでいる家を訪ねた。合唱隊のメンバーは、町のいわば最も「芸術的」な「貴族階級」であるからか、彼らの家の大きなサロンは、アメリカの中流階級の家と少しも違わないように見えた。ソファには花模様のカバーがかけられているし、ふかふかの絨毯も敷かれている。陶器の人形や、モロッコ皮のストールも置いてあって、そこで少年たちが、

角力をとって、ふざけ廻る気配もない。これが少年たちの共同生活の場かと思うと、私は却って、やや不自然な病的なものを感じるのである。

トニーが黙っているの、私は、夏に、日本を訪れる合唱隊のメンバーに会いに来るのが目的だったのだが（私は教会のために小さな記事を送る約束をしていた、来てみると、ここに一人だけ日本人がいるから是非会って行け、と言われたのだ、と説明した。アンソニー・ジャクソンは頷いたが、彼が人種的同胞に対して何ら親近感を抱いていないことは明瞭なのだった。

黒人の寮長は町の中の施設を見学したか、と私に訊き、もしまだなら、全部見て行ってくれ、農場も、牧場も、プールも、体育館も、トニーを案内につけるから、と愛想がいい。

彼がサンドイッチを食べ終るのを待ってから、私は外套を着て、小気味よいほど乾いて冷たい薄曇りの外へ出た。トニーはクローク・ルームから、鮮かな青いアノラックを着て出て来た。その青は広々とした枯芝の荒涼とした光景に溶け込んで、トニーの若々しい、それでいてどこことなく考え深げな東洋人独特の表情を包んでいた。

「少年の町」が設立されたのは、一九一七年のことで、創

立者は有名なフラナガン神父というカトリックの司祭である。一九三八年にはミッキー・ルーニーと、スペイン・トレシーイの主演によって、この町の物語は映画化された。「少年の町」はアメリカ民主主義の一つの成功物語だった。この町の維持費は、アメリカ及び、世界各国の人々の善意によるものであり、少年たちは、アカデミックな、或いは職業的な、あらゆる訓練をその素質によって受けることができる、とされている。平凡なようだが、あらゆる人間が可能性を開発されること、――靴みがきの少年が大統領になるのかも知れぬこと――がアメリカの精神だし、希望なのである。商業学校では、製図、機械、木工、印刷、製陶、製パン、理髪、製靴、ラジオTV組立修理、自動車修理、などのコースに分れて勉強できるようにになっていたし、もっと土に親しみたい青年のためには、農場と牧場があった。「少年の町」の野菜と食肉は、すべて自給自足である。彼らの牛はしばしば4日クラブの賞さえ取っているのである。

私は本部のホールに掲げられた一枚の写真が印象に深かった。それは高校生たちのための食堂の写真なのだが、内部は美しいシャンデリアで飾られ、肌の色も服装もさまざまな少年たちが、極く自然な態度で食事をしている図であった。その証拠には、一部の少年たちは、いかにもカメラ

マンの出現を訝しがったらしく、いつせいにこちらを向いていた。こちらを見ていない少年たちは、必ず、近くに坐った仲間とお喋りに興じているらしく、その様子が、すぐれた首筋や、別な方角への視線の集中によって証明されていた。つまり、彼らは、決して写真に写されることを、嫌がってはいなかったのだ。ということは、彼らは、「少年の町」という保護施設にいることに、いささかも、こだわりの持っていないということでもあろう。

さて、トニーと私は、初め屋内体育館^{インドール・ヘックス}へ行った。脱衣場には、自然な乱雑さで、子供たちの衣服が脱ぎすててあり、そこで体操着に着換えた子供たちは円陣を作つてレスリングの最中であつた。そこには桃色やチョコレート色や黄色や、さまざまな色の少年の肌が、生々と嗅いたり叫んだり笑ったりしていた。それらは一向に男臭くもなく、むしろそれらの健康な肉体の動きは皮をむかれた動物のはねるのを見ているような、無機質な爽快さを持っていたのである。体育が終ると、少年たちは、シャワーを浴びて汗を流し、零下に近い気温も身にこたえぬほど温まって、それぞれの家路につくらしい。

地下室の広々としたプールは、誰も泳いでいなかったが、手をつつこんでみれば、温泉プールなみの温かさであった。

それからトニーと私は、丁度、昼食時になったので、二人とも一緒に食べられる職員用の食堂に行った。セルフサービスだが、熱いたっぷりしたスープも、コテージ・チーズを淡雪のようにのせたサラダもあって、食後にはタピオカ・プディングまで貰えるのだった。

私はコーヒーを、トニーは牛乳を持って、テーブルに就くと、私は初めて、彼とやや、個人的な話をするようになった。

彼は、九つ迄、日本にいたのである。

「日本ではどこに住んでいらつしやったの？」

「東京の近くです。場所の名前は忘れしました」

決して笑わないトニーは、時々眼鏡をずり上げながら答えた。

「日本では、誰と暮していたんです？」

「おばあさんです」

「まだ、生きていらつしやる？」

「そう思います、よくわかりません。イイモリ、という名前です」

トニーは自分から話し出した。生みの両親は、離婚したのだった。というより、イイモリのお祖母ちゃんから、父が母を置いていなくなったのだ、と聞かされたことがある。それから母もいなくなり、彼はお祖母ちゃんと暮して

いたが、間もなく、年寄りではビッコになった。

どういう病気でビッコになったのか、トニーは知らないのである。とにかくお祖母ちゃんは悲しそうな表情をして、トニーに、もう御飯を作つてやれなくなったから、と言った。

御飯を食べられないのなら仕方がない、とトニーは思い、それから間もなく、子供ばかりいる施設に移った。そこに二年ほどいるうちに、彼はジャクソンというアメリカ人の夫婦に貰われることになった。

このジャクソン夫婦については、トニーは何ら詳細な説明を加えなかった。彼らはトニーと養子縁組して、フロリダに住んだ。フロリダに住める夫婦は、みんな仕合わせになれそうなのに、と私は考える。たった一つの理由のためだ。私は暖かいところが好きなのである。

冗談はさておいて、ジャクソン夫婦はフロリダに住んでも決して幸福ではなかった。彼らは毎日喧嘩をした。夫婦喧嘩が始まると、トニーは、ソファの蔭に隠れた。夫婦は、あらゆるものを投げた。一度などは壁に掛けてあったメキシコの農民用の大鎌まで、トニーの隠れているソファにとんで来て深く刺さった。トニーは命拾いをしたのである。

その結果、夫婦は別れることになった。そして二人とも

それぞれの理由で、子供など引き取れない、と言った。トニーがもう少し大きかったら、ジャクソン氏はトニーをハウス・ボーイとして役に立つと考えたかも知れないし、ジャクソン夫人もトニーが間もなく、キャフエテリアで働いて、一晚にゆうに六、七ドルは稼いでくると考えたかも知れなかった。しかし、トニーは当時まだ、十一だったのだ。そこで少年はこの町へやって来たのだった。もうソファの後に隠れることもいらない。ジャクソン夫妻は決して豊かではなかったから、あの家にいたら、トニーは決して大学へやってもうたえそうになかった。「少年の町」へ来たからこそ、州立大学へ行く費用もでるのだ。

「しかし僕は、あのうちにいたかったんです」
トニーは、口ごもりがちに言った。

「どうして？」

「だってあそこは、僕の家ですから」

私たちは熱い昼食を食べ続けた。トニーと同じ年頃の日本人の少年が、同じ料理を食べさせてもらったら、彼はそれをレストランの料理、だと思っただかも知れない。しかし今、トニーと私が食べている料理はレストランのものでもなく、家庭の味でもなかった。

「日本語は覚えてる？」

トニーは少し不安そうな表情をした。

「スコウシ」

トニーは、初めて二世風の日本語で答えた。

「アリガト、サヨナラ、オジョウサン、サムライ」

トニーはそれらの言葉を昔から覚えていたように言ったが、それは錯覚なのである。九つの子供が、オジョウサンとサムライという言葉を書き綴りに書いて記憶しているということは考えられない。彼はこれらの日本語を恐らくアメリカで覚えなおしたのである。

「でも、そのほか、後になって、もう少し覚えた」

トニーはそこで初めて微かな笑顔を見せた。

「バンカ、バンカとやっちゃまえー」

バンカ、バンカという擬声語はよくわからなかったし、「どかんとやっちゃまえ」とか「ばいんと、やっちゃまえ」などという流行語の間違いではないかとも思えたが、トニーが拳を握り、ボクシングの真似ごとのようなポーズをとってみせたところを見ると、とにかく、それはやはり喧嘩の合図に違いないらしいのだった。

「それから、もう一つ」

トニーは降伏する兵士のように、両方の腕を高々と上げながら、妙にかん高い抑揚をつけた声で言った。

「もう、いい加減にしてくれよー」

私は理由もなく心が滅入るのを感じながら、今の発音は

非常に自然でよくできている、と賞めてやった。するとトニーは、ますます頬を紅潮させながら、もう一度、両手を上げ、

「もう、いい加減にしてくれよー」

と叫ぶのだった。その仕草は完全にアメリカの、それも若者の惡ふざけだった。日本人の大人だったら、「もういい加減にしてくれ」と言う時、彼らのように威勢よく両手をあげたりせず、むしろ手をあげる力もなく、弱り切つて、しいて何かするとしたら、両手を合わせて拜むのだと私は教えてやるべきだと思つたが、アンソニー・ジャクソンはつまりはもう日本人ではないのだから、そんなことも必要がないと考へて私は黙つていた。

2

私はその翌日、更にもう一度、「少年の町」を訪れた。同じような灰色の寒い日である。

昨日は院長のウエグナー神父も不在だったし、合唱隊の練習風景も見ることではできなかったからだつた。

ウエグナー院長は、秀でた額を持った精力的な初老の神父である。彼のオフィスは物でいっぱいだった。本や記念品、トロフィーなどの間に写真立てに入つた町の出身者らしい青年たちのスナップや肖像写真が十数枚も飾られてい

た。

神父は私に、感想めいたことも聞かず、それが却つてこういう立場にある人物としては印象的であつた。

「エプロ号の艦長はこの出身者ですよ」

ウエグナー神父は、明るい表情をくずさずに言つた。エプロ？ 私は聞き返しうになつたが、すぐそれは、ごく最近北朝鮮沿岸でスパイ活動をした嫌疑で、捕えられたままになつてゐる米国の情報収集艦の名前であることを思い出した。

「あれはいつのことだったでしょうか」

「先月末でしょう」

神父の態度は平明であり、それ以上何の言葉もつけ足されはしなかつた。エプロ号の艦長はあらゆる意味で時の人であるが、「少年の町」のかつての住人の中で彼ほど世界中の人々に知られた人物は、やはり他にはいないのかも知れないと私は考へていた。

ウエグナー神父の部屋をでる時、私は、ハンドバッグから名刺を出して、アンソニー・ジャクソンに、何か援助が必要なときは、ここへ連絡するように言つて下さい、と頼んだ。

「オーケー、お預りしましょう。しかし、彼は有能な青年ですし、彼に必要な援助はすべて与えられていると思いま

す」

「勿論、そうでしょう。只、彼がこと日本に関する何かを必要とした時だけです」

私は神父と握手をして外へ出た。それから事務所の人の運転する車で、合唱隊の少年たちが日曜のミサの前の練習をやっているオーデトリウムへ聞きにでかけた。

五十人ほどの少年たちが——年頃も小学校の上級くらいから高校まで——集まっている階段教室の一隅に私は坐り、ドイツ系の名前を持った音楽指導の神父が、発声練習をさせていくのを、じっと聞いていた。驚いたことに少年たちは、音程がそれほど正確ではなかった。彼らはしばしば一番歌って、後で神父がピアノを叩いてみると、半音から一音くらい狂っていた。この子たちが、日本へ来て、お金をとって歌を聞かせるのか、と思うと、私は何となく憂鬱な気持ちになった。これは、ファミリー・コンサートとしては立派なものだろう。しかし、彼らの音楽はプロとして通用するものではない。

少年たちの置かれた環境が良いだけに、私は別の貧しさを嗅ぎとるのかも知れなかった。「少年の町」の合唱隊だというだけで、人々は、それを受け入れやすい。或る人は悲しみのある人生から生まれた音楽は良質のものである筈だ、という信念をもって。或る人は、音楽に対してではな

く、少年達の存在それ自体に対する無条件の好意から。その結果、普通の少年たちだったら「売り物」にならないコースを持って、少年たちは遠く日本まで、巡業する。

この町にあるものは、贗物が多い、と私は少年たちの「主よ、憐れみたまえ」を聞きながら思った。彼らの合唱隊もまがいものなら、アンソニー・ジャクソンも贗のアメリカ人だった。少年たちを囲んでいる、家族的温かさも厳密に言えば贗物でしかないのである。家庭の温かさというのは、もっと整っていないのが普通だった。プールや体育館があるというだけで、それはもう、家庭ではない、と私は思う。程度の差こそあれ、家庭は、金に困っていないければいけない。しかし少年たちは、決して月末の支払いがどうなっているかということに心配している大人たちの会話を洩れ聞くこともないのである。そういう意味で、彼らは偽りの富裕さの中にさえ置かれているのだった。

私はその朝、ミサに出席してから、寒風の中をオマハのホテルへ戻った。薄暗がりの日のように思っていたのは、あたりの木や草が灰褐色をしていたからで、後から考えてみると、それは、人工衛星の飛ぶのも見えそうなほど澄んで晴れ上った、美しい冬の目であった。

アメリカから帰ると名刺を一枚渡したから、と言う気休

めのためだけでなく、私はもう「少年の町」のことも、トニーのことも思い出さなかった。トニーが日本人の顔をしていたから、あの時私はちよつと動揺しただけなのだ。しかし彼の心はアメリカ人になり切っているだろう。私には外国人の気持はわからない。小説にも長篇の主人公として描けるとは思わない。人間は皆同じだとか、国際間の友好を深めてとか言うけれど、それも程度問題だろう。外人は、多くの場合、その思考の質も、パターンも違う理解を越えた人間として、私の前に立ち現われる。

その年は残暑もなく、早々と澄んだ秋陽のきざしが見えた。最初のニュースは九月十二日であった。北朝鮮で捕えられているプエブロ号艦長以下八十二人の乗組員が、北朝鮮政府樹立二十周年記念行事を取材に来ていた日本人記者団を含む外国記者たちと平壤で会見したというのである。

九月十四日付の朝日新聞の岩垂特派員の報告によると、「会場に現われた乗組員たちは、将校が褐色の木綿のシャツにズボン。水兵たちは薄いグレーの木綿のシャツとズボン姿。靴はグリーンのキャラバンシューズ。頭髮もきれいに調髪されて、顔色もいい」とある。

彼らは、交々に立ち上つて、早く国へ帰りたいという、切々の思いを訴えた。ブッチャー艦長は、鋭い目つきの中肉中背の男で、同じ岩垂特派員が、「月刊ペン」十二月号

で詳述しているところによると、

「私は、三十九歳、ネブラスカ州出身。海軍中佐。われわれのために時間をさいて下さった各国記者の皆さんに感謝する。皆さんが、われわれの答弁を正確に、公平に世界世論に伝えてほしい」

と挨拶したのだった。私は改めてプエブロ号艦長の生い立ちを思い出した。この人だったのか。しかし私はまだ半信半疑だった。ネブラスカ州というのは、まさに「少年の町」があるところではある。しかし少年達の出身地は必ずしも、ネブラスカ州とはなっていない。捨児は別としてアソニー・ジャクソンは「日本」と書かれているに違いないのだ。

私は岩垂氏の記事の中からブッチャー艦長の言葉を読み続けて行つた。

「プエブロは情報収集艦として建造されたが、海洋研究船として偽装し活動してきた。一九六七年五月に就航、同年九月に作戦行動を開始したが、日本に着いた直後、われわれの活動区域が、朝鮮の東方水域であると通告された。具体的には、朝鮮民主主義人民共和国の海岸の状況を確認すること。これには電波探知機による盗聴も含まれる。そして情報収集に対する共和国の反応を確かめること、などであつた」